

法用寺の歴史

養老4年(720)、得道上人によって、現在地より西に約1kmの山中(堂平坊ヶ沢と思われる)に観音堂が建立され、本尊十一面観音を奉ったのが始まりとされる。

寺伝によれば、願主聖武天皇、本願徳道上人、開眼行基菩薩。仏師稽文会、稽主勲。当時は七間四面のお堂であった。寺紋の菊花紋は、桓武天皇から授かったと伝えられる。

開基からおよそ90年後の大同2年(807)火災で焼失したが、大同3年、嵯峨天皇の綸言を奉じて本願徳一大師により旧地を改め現在地に再興したと伝えられる。当寺は天子本命の祈願、鎮護国家のための霊地古跡である。

本仏は秘仏だから、頭に尊体は拝めない。(中略)
常は三菩薩を座せしめ、中尊は十一面観音、右は勢至菩薩、左は毘沙門天、並びに三十三身の尊容が面に立つ。

塔には三界独尊の釈迦を安置奉り、脇には文殊・普賢を左右に安座させて朝帝の武運を祈る。祈願の霊場。(『会津寺院縁起』より)

時を経て中世、修験道隆盛の頃には霊峰飯豊山の別当職を拝受し、最盛期には三十三坊を擁する勢力を持っていた。その後寺勢は衰退したが、江戸時代会津松平藩の治世になり、三重塔、観音堂が再建された。現在のお堂はその頃のもの。

法用寺の堂塔と仏像

■■観音堂(江戸中期・県重文)

現在の観音堂は明和5年(1768)の造営と推定される。方五間、県最大の観音堂。飯豊山山岳信仰の名残として、堂内柱に名書がある。13歳になった男子が飯豊山に入山する前一週間、観音堂に堂籠りをしていた名残である。

本尊：木造十一面観音立像2軀

(平安藤原前期・秘仏・県重文)

カツラの一木彫成。台座は別で連弁は彫刻せず墨書き。眼は切れて長く、口は盛り上がり大きく引き締り、峻厳な風貌を示す。裳、天衣の彫刻は深く明らかに翻波の跡が見られる。地方作ながら藤原前期の特色をよく示している。

厨子及び仏壇(鎌倉・国重文)

会津地方において最古の遺構。厨子に鎌倉時代正和3年(1314)の銘の棟札が蔵されている。厨子は唐様の大きなもので、桁行三間、梁間二間、寄棟造り。会津ではこの種の遺例は珍しい。

木造金剛力士蔵(平安中～後期・国重文)

藤原時代の作。櫓の一木造で阿形像が像高224cm、吽形像が216cm。藤原時代のこの作例は滋賀県の善水寺と並んで最も古いものであり、全国でも希少な文化遺産である。

伝木造得道上人坐像(鎌倉後期・県重文)

法用寺を開基した名僧得道上人の肖像彫刻。造像の時代は鎌倉後期と思われカツラ材の堂々たる寄木造りで目は玉眼で水晶がはめ込まれている。

十一面観音版木(室町後期・県重文)

版に「雷電山法用寺御正躰」「応永4年(1397)丁丑二月九日」の陽刻がある。縦62.3cm、横30cm厚さ1.7cm。板に十一面観音菩薩像が刻まれており、左手に水瓶、右手に与願印を結び、数珠をかけ、流れるような衣文と繊細な瓔珞錫杖を持つ長谷寺様式。

■■法用寺三重塔(江戸中期～後期・県重文)

会津に現存する唯一の塔。安永元年起工、安永9年(1780)完成。寺伝によれば現塔は3棟目。懸柱式、銅葺屋根三層で相輪まで含めると全高約23m。初重から三重まで屋根の低減率が小さく(大

本尊：釈迦三尊(釈迦如来・文殊・普賢)

■■仁王堂(室町)

現在金剛力士像は観音堂に祀られている。仁王門の注連縄は、雷電山守護神である龍神を模して、蛇の形に制作されている。毎年正月7日には村の子供達がこの注連縄を担いで村内を練り歩き、一年の無事を祈る「蛇のご年始(町重要無形民俗文化財)」が現在も伝えられている。

■■銅鐘(室町・県重文)

文明6年(1474)に鑄造されたもの。

■■子安地藏堂

地藏堂は日光の大悲閣から移築したとされ、極彩色は衰退したものの彫刻が大変美しい。

本尊：子安地藏尊